

KINO PRESS

木野通信

Kino Press is a newsletter published by Kyoto Seika University and distributed to students, faculty, administrators, graduates and other members of the university community.

1992年7月7日
京都精華大学発行

KYOTO SEIKA

第17号

UNIVERSITY

This publication is intended to keep readers informed of all aspects of K.S.U.'s development, including on campus events, personnel changes, student news, and perspectives on campus life.

京都精華大学 企画室
京都市左京区岩倉木野町137
TEL (074) 702-5201

一九六八―九年、日本の大学はいわゆる大学闘争で大揺れに揺れたが、その際に提出された、大学の本質に関する問題は先送りされたまま混乱は沈静にむかった。こうして世界の他の多くの国と同様、日本も「大学時代」を経験した。今日一八才人口の大幅な低下によって生じた大学の「冬の時代」の到来を期に日本の社会は「第二の大学の時代」に入った。社会の関心は大学を迎える大きな変革と「生存競争」の帰結にむけられている。現在のところ、それがさら

に大きい社会的なうねりに向かうかどうかは、だれにもはかりがたい。ほとんどすべての大学は、直面する新たな「個別的」危機を生き残るために、志願者数の減少をどうやって避けることができるか、について種々の作戦を展開している。その内容は、国際的な大学よりもはるかに成果をあげてきた日本の企業をモデルにする大学経営の改良、あるいは悪くすると管理の強化につながってゆくおそれがある。この傾向は、一九九一年七月以来施行されることに

なった、文部省指導の大学の「大綱化」に乗って、大学の教科課程が、大学内・大学外の両方の領域で、いちじるしく自由化されたことに伴う、大学の自己評価によって、さらに強化されようとしている。つまり数年内に大学は自己評価を実践することによって、自浄能力を身につけることを要求されているわけである。このような動きは、これまで大学で行われていた教授会自治が、しばしば形骸化し、大学が自らの欠点を克服する自浄能力を失っていることに対

する、社会のいらだちを反映したものである。その限りにおいて、これに反論を加えることは困難である。しかしこれは同時に、日本の大学を企業的方式によって運営する道に通ずるだろう。そこには知の独立性を保証する機構が失われる危険が大きい。それも、もとはといえば、大学が自らに課せられた知の責任を、十分にとつてこななかったためである。しかしこのような大学の危険が、世界と日本における基本的な思考の枠組が大きく転換しつつあり、日本

の針路が改めて基本から見定められねばならない時代と重なっている、ということが、大学だけでなく、日本全体の直面する真の危険につながっている、という指摘は、これまでほとんどなされてこなかった。つまり、世界の新しい枠組にむかって、日本自身が何を貢献できるか、を理論においても実践においても明らかにせねばならぬときにあたって、大学が自身の社会的責任を明瞭に意識せぬままに、企業まがいの生存競争に心を奪われているならば、日本の表面的な経済的繁栄の空洞化は避けられないだろう。

第二の「大学時代」

何が問題か

学長 柴谷篤弘



恐らくこの種の困難を乗り越えるためには、単なる経済的な生き残りの方策は十分ではないであろう。時代の要求に真に応ずることのできる大学でありつづけることを止めるならば、大学は生き残りに値しない、とさえいえるだろう。これは何よりも、どのような「知」の内実が大学が確立し、それをもって、世界と国と地域に、社会全体と若者にむかって発信し、奉仕することができるかにかかっている。私自身は、時代と社会にはびこる偽りをあばき、真実がどこにあるかを明らかにしてゆく役割を忘れては、大学は存在の価値を失うのであって、大学に動くものは、この目標にむかって、自ら大学を助けてゆかねばならないと思う。



始まりました二期工事

◇小川に面した染織実習棟

美術学部の実習関係の施設は年々整備されてきましたが、最後に残っていた染織の実習施設が今年の五月から工事にかかっています。場所は四号館跡です。水い間ハレハレ校舎が関係者に色々と心配を掛けていましたが、ようやくかねての懸案を解決することができそうです。建物の規模は約二四〇〇㎡で、竣工は来年の三月の予定になっています。設計は本学教授の上田篤先生が担当されています。

今また四号館の裏側(北側)を流れていく水路を、今度は新築棟の前面に流すことになりました。いささか水量が少ないときもありますが、きれいな谷水がすぐ近くに流れているのを眺めながら勉強できるのは、素晴らしいことだと思います。二号館、新築棟、五号館、六号館に囲まれた空間は、これまで学生生活の溜まり場として、又学術関係の時のステージ設置場所として、親しまれてきたが、今またより広くなり、小川が流れるこの空間はさらに素晴らしい交流の場所となることとてしよう。

◇グラウンド造成工事始まる

叡山電車の京都精華大前駅の横を工事車両がひんばんに往來していましたが、これはグラウンド造成のために道路を作っているからです。グラウンドの竣工は一九九五年三月の予定ですが、とりあえず仮グラウンド(完成予定の1/2)として来年三月に竣工することになっています。グラウンドは三〇〇mのトラックがとれ、東西八〇m、南北一〇〇mとなっています。夜間照明については、地元の方の了解が得られていません。

ので、現在のところペンディングになっていきます。又グラウンドの近くにテニスコート五面も予定されています。グラウンドが位置するところは、叡山電車の京都精華大前駅と二軒茶屋駅の間にあります。近くには住宅があり、大変閑静なところです。地域住民の理解がなければ、せっかくの施設も十分に活用することができません。使用に当たっては良識ある態度が望まれます。

◇いよいよ二期工事が本番です

来年になりますと、図書館・体育館・厚生棟(食堂・書店・文房具・喫茶・講義棟・クラブBOX)の工事が次々と始まります。文字通り二期工事が本番を迎えることとなります。図書館は情報センターとして、AV関係施設と統合され、ギャラリ(展示等機能)の運営、特色ある資料の収集、他機関との情報ネットワークシステムの整備など、情報に関する総合的な機能を果たす施設として利用者のニーズに応えることができるようになります。

このところ各方面のご好意により、美術作品の寄贈申し込みが相次いでいます。情報センターが竣工されますことにもなります。この情報センターは市民にも開放される予定になっています。体育館はメインアリーナにバスケットコート二面を予定し、付属施設としてサブアリーナと教室・研究室・ロッカー室・シャワールーム等が予定されています。クラブ活動もますます活発になることとてしよう。厚生棟には食堂と喫茶室及び書

店と文房具店(画材も含む)がおかれ、さらに多目的に使用可能な和室も考えられています。老朽化により雨漏りしたり、風で壁が落ちたりしましたが、いろいろと懐かしい思い出のある食堂ともまもなくお別れです。二期工事全体の竣工は、一九九五年三月を予定しています。大学にとっては大変な財政負担になりますが、何とか実現にこぎつきたいと考えています。

◇施設整備に浄財を

アメリカの大学の施設を視察する機会がありました。図書館や美術館、コンサートホール等の建物に個人の名前を冠したものを多く見ることができました。例えば、イェール大学に古今東西の貴重本や地図類などを収納している素晴らしい図書館施設があります。施設の名称は「パイネツキ図書館」となっていました。パイネツキと言う人が図書館建設費用と資料購入費用と図書館運営費(人件費等)を纏めて寄贈したそうです。大学が給料を払えなくなっても、この職員は大丈夫ですと関係者が冗談を言っていました。本当に羨ましく思いました。

教育事業に寄付をすると言うのはアメリカの国民性でしょうか。日本は豊かになったと言われていますが、なかなか教育事業に寄付をするという事にはなっていない。本学は、大学冬の時代を乗り切るためにも、施設の整備に渾身の力を傾けています。あなたの浄財を献じていただきました。切にお願ひ申し上げます。

就職部だより

人文学部第一期生が春闘の真最中です。短期大学部英語英文科と美術学部の卒業生が活躍している一部の企業を除けば、先輩のいない第一期生の諸君は何かとハンディが多く、苦勞も多し。またバブル崩壊後の不況の多い就職活動は、気の毒。というほかなく、とりわけ女子学生の就職は格別です。

そんな状況のなかで人文学部第一期生諸君は、後輩のためを含めて、懸命にがんばっています。3名の顧問の方々も、わが子のようにあるいはわが孫の如く学生諸君の将来を考えた、よりよい結果を得るべく努力してくださっています。現時点では第一期生諸君の就職結果をお祈りします。

深作先生を偲んで……

思い出

深作先生に初めて会ったのは一九六八年の四月である。先生は開学の最初から専任であったが、私ははじめの一年は非常勤だった。会う前に当時の学長の岡本清一先生から「あなたなどは一度好きになりなさい」と言われたことをよく覚えて

いる。そのとおり気さくなおもしろい人というのが第一印象だった。先生と私は気質は違っていたが、どこか似ていたのか、学生に間違えられたこともある。それも、いまは遠い思い出となった。

笠原芳光

深作先生と煙草のこと

十数年前のことですが深作学長路堀川下った、上品運善寺に於て先生のご葬儀が行われました。ご出棺直近の時、私は突然胸苦しさにおそわれ全身から滝のような汗が流れた。うづくまっしてしまいました。翌日レントゲン撮るはめに、原因不明のまま過度の喫煙による身体状態のみが指摘されました。千歳一週の時、節煙を決意するもの三日と続きませんでした。

斎藤 博

十数年前のことですが深作学長の時代、私は理事の末席を汚していました。たび重なる長時間の会議のあと、先生の愛車で下鴨の家までよく送っていただきました。車内はのちまちなみ煙が充満し、深作先生の小刻みな咳ばらいの音が耳に残っておりま。くわえタバコをアイロッドワークに余念のないお姿を想い浮かべております。

合掌

教職員人事

〈新任〉

- 住野天平助教(美術・建築)
- 福岡正蔵(事務局長入試広報課)
- 以上一九九二年四月一日付
- (退職)
- 川端幹人(事務局入試広報課)
- 以上一九九二年三月三十一日付
- 武蔵篤彦(美術学部講師)
- (一九九二年二月二十日～一九九二年十一月二十日オーストラリア)

一九九二年度

大学役職者

- 学長 柴谷 篤弘(教授)
- 美術学部長 斎藤 博(教授)
- 人文学部長 矢ヶ崎庄司(教授)
- 一般教育主任 大澤真一郎(教授)
- 教務部長 中平 佳男(助教)
- 学生部長 小林陸一郎(教授)
- 広報部長 中尾ハジメ(助教)
- 図書館長 山口 瑛子(助教)
- 就職部長 吉村 昭市(助教)
- 事務局長 景山 喜巳(事務局)

一九九二年度

大学在籍法人役員等

- (役員)
- 理事(学長) 柴谷 篤弘
- 理事(企画室) 杉本 修一
- 理事(企画室) 松浦 逸郎
- 理事(企画室) 末石富太郎
- 理事(助教) 松谷 昌順
- 顧問(理事) 駒井 四郎
- (法人)
- 理事長(教授) 笠原 芳光
- 法人事務局長 井上 弘次

アメリカ

●佐々木 薫さん (人文学部4年)

アンティーク大学寮で生活。アパラチア、カリフォルニア等へフィールド・トリップ。

あこがれたいなどころはありました。英語力を試したいとも思っし。個人研究でとりあげた女性学もアメリカからおこったでしょ。

大学のあるイエロースプリングスはひとこととて、いなか。大学とちょっと家があるだけ。だからみんな寮に住んでいて、わたしたちも寮にはいました。ルームメイトとはすぐなじんだ。みんなに似てる、て言われてた。

個人研究の方が中心なので、授業の英

語で苦しんだということはないよ。週一回中学校に通って一緒に授業したりとか、町の人とコミュニケーションとったり。いま思うとその方が印象に残っている。ただ大学だといろんな国や人種のひとがいるので柔軟に受け入れようとしてくれるんですけど、フィールドトリップでむこうの学生と話そうとしたときなんか、知識や英語力のないことに気づいてショックを受けたこともあった。

むこうだとひとに見られているという意識がないけど、こっちに帰ってきてきゅうくつな感じがする。むこうだと他の人が何していても気にしないんだけど、こっちでは人の目を意識してしまう。女の子もほとんど化粧してなくて、ごはんをたべるときもジャージだったりするけど、全然かまわないんですよ。だからきゅうくつ。むこうでは日本人同士でも問題意識を高めるために、これについて話そうなんてやったけど、こっちに帰ってくると、時間に追われてできない。何をすればいいかとまどっているところがあります。

みんなで女性問題について批判しあうとかそういうことができていた。そのひとたちとは本音でつきあえる関係になれたのがよかった。考え方が固まったというか、ひとに意見を求められたときにすぐこたえられない自分がいやだったけど、考える時間があるのが大切だと考えるようになった。いやだった部分が肯定的に見られるようになりました。人間は多様なものやからそれでいいや、て。

●田中 広伸さん (人文学部4年)

タイ

住むのはユース、学生寮、農村ホームステイと全部を経験。村の小学校建設にも参加した。



高校のころ、知り合いがタイに居て興味わいてきた。東南アジアは似てても違う。西洋よりもひかれるものがありました。

サンパトンで、チェンマイの近くの農村なんですけど、ホームステイしながら二週間、小学校の図書館つくりました。タイのホームステイ、本当に異文化でした。ぜんぜん想像しなかった。ひとつの敷地に一族がみんな一緒に住んで、つながりがあって。ぼくはああいうのが快適でした。不便そうだけど実は機能的なんですよ。こどもたちとテレビ見てもないことばかりいうてました。サンパトンではお金があまり必要じゃ

ない。自給自足的な。おじいさんがビールおごってくれたりもしたけど、それはやっぱり彼らにしたら高いんですよ。タイの人は日本人よりつつきやすい。日本の昔の零細気味というか。

行ってさらに興味が増しました。まるっきり違う文化の中に少しでもとけこんでいたというの、逆に日本を見る目が養われた。タイにしばらく居て、タイから日本を見たら日本がよく見えてくるんですよ。観光客とか駐在員とかすごい日本人のうのかな、経済大国いうのを感じます。むこうに居る間日本人にすごい異和感ありましたからね。一番感じたのは貧富の差です。むこうのひとの間でもそ

うだし、ぼくらがいくと金持ちですからね。とまどいがありました。

ああいうのんき、といえど悪いけど、生活をしてるな、毎日を生きているなどいう感じが、そういうところが好きです。タイに帰りたいですね。考えるようになったのはたしかです。日常のことがむこうではなんでも刺激でしたから、日本に帰ってきてもわりと悩むんです。まだ、タイで何を待たのか、というのが整理しきれなくて、ひとと話しても考え込んでしまうときがあるんですよ。でも変に妥協せずにやりたいことやろうと思ってるし。ずっとタイとかかわっていきける仕事につきたいですね。



オーストラリア

●小山 千栄さん (人文学部4年)

ホームステイしながらメルボルン大学で授業。アポリジニー共同体、国会等を訪れる。

メルボルン大学では、先生はわたしたちのレベルにあわせて簡単な英語でゆっくり授業してくれた。朝二時間やって三時間の休みでまた二時間というように、一日二科目しかない。ゆっくり時間をとっていることが一番印象に残りました。考えたり、考えを書きとめたりする時間がゆったりとれた。しかも授業は学生が質問しなければ成り立たないようになっている。これをどう思うかって先生がかならずきく。今まであんな日本の教育制度のなかで上から強制されることばっかりやったから、違う制度もあるんやということを感じられる機会になった。

けど文部省の影響で育ったわたしたちには論理的な思考力が欠けていることが身にしみてわかった。フィールドトリップに出かけても、スケールの大きいプログラムやったにもかかわらず、わたしたちの知識のなさから対応できてないことがありありとわかった。とっかかりだけで帰ってきた感じだ。

英語が好きだった。英語圏の人で自由な気がした。論理的なイメージもあった。実際行ったら、自己主張しなければならぬという意識の強さにはまいった。たとえば日本にいるときは気づかへなかったけど「idea」という単語。日本で使うのとは違って「目的」みたいな強固な意味があって、強烈で。わたしにとっては英語のフィールドワークでもあった。言語を学ぶことは話されている国の文化を学ぶことというでしょ。日本の土壌の上でことばをころがしているだけではわからないと思う。向こうでいいやな目にも会わな。

ホスト・ファミリーがアジアの料理をよくつくってくれて、わたしはアジア人のはずなのにアジアの食べものを何にも知らなあと感じた。食べ物には目をひらかされた。日本に帰ってもいろいろつくっている。

わたしにとっては発見、発見で、自分の閉鎖性に気づかされた経験だったかな。そういうことで自分が受けてきた教育とか今までの自分を整理する必要を感じた。

新入生歓迎キャンプ'92

松谷昌順

今年も人文学部主催「新入生歓迎キャンプ」(実行委員長・栗葉満)が、九月三日(休休高原)が開催されました。人文学部は一九八九年開設以来、本年で四年目を迎える三月には初の卒業生を出すことになり、いよいよ完成年度となりました。

新しい大学、新しい人文学部の新入生諸君が、早く大学生活になれ親しみ、人文学部の研究内容、どのような講義、どのような教職員がいるのか、また、京都精華大学がどんな大学になりつつあるのか、これから大学創りの一員にもなってもらおうと、この歓迎キャンプは昨年引き続いて二回目になります。

栗葉学長による四月一日の入学式の余韻が覚めやらぬ二日、新入生三〇〇名、在学生約七十名、教職員約二〇名、総勢約四二〇名が一〇台

留学生スピーチコンテスト

(日本画1年) 李英姫

スピーチで私が選んだ題は「日本のお風呂や」でした。入り口は別なのに番台は一緒というのはいやほや不思議です。

そんなことを話そうと準備したにもかかわらず、じょうずに話そうとするほど解らなくなっていました。準備していた用紙も見えはらず、片言の日本語が一層滑り、散々ものになってしまいました。スピーチ前にクラスの友達と食事などしながら私の祖国のこと等いっぱい話していたので、李さんなら特に上手にスピーチできるんじゃないかと、励まされていたのに残念でした。

1992年1月31日 留学生による日本語スピーチ大会

91U037	丁仁英	私のともだち
91Y L02	斯飲都榮	私にとっての大きな出来事
91Y L04	李世仁	お正月
91T050	齊丹	贈り物とお礼
91D059	簡煥儀	日本の大学に入学して
89Y L01	紀錦	日本の大学生
91J 041	李英姫	日本の文化
91J 040	張聖	今考えること
91Y L03	周亮	お年玉
91Y L01	高展	日本の食文化
90Y L02	林在明	老人問題
91X U02	陳湘琴	私にとっての大学とは
90L228	陳輝	伝統文化
90U37	金演熙	日本と私
91Y L04	沈仁榮	日本の若者
92年度京都府留学生スピーチコンテスト奨励賞受賞		
90Y L03	孫路易	クリスマスの過ごし方
マンガ研究生	金錫煥	マンガを選んだ私
90Y L01	李殷養	うさぎとかめ
90L229	洪榮振	外から見た京都
90L227	申昌浩	私の夢

精華でこの一年間ただ時間を過ごしたのではなく、言葉もすこしづつだったけど随分覚えて話せるようになってきたと思います。

また、福祉国家と言われる日本においても貧富の差があるということ、特に思い入れの面があります。このようにこの一年間で、講義ではかかわることのできない社会勉強をすることができたということは幸せなことだと思います。

図書館の開館時間が延長されます

今年度より、前期と後期試験の、試験一週間前から試験終了まで図書館の開館時間が左のように延長されます。

平日 午前8時30分～午後8時
土曜日 午前8時30分～午後3時

木野評論 第23号

頒布のお知らせ (1992・3・20発行)

今回の特集テーマ「環境」ご希望の方は左記事務局まで代金(切手70円)をお送り下さい。

京都精華大学図書館内
研究出版委員会事務局
Tel 075-702-5137
*定価500円(送料260円)
*店頭販売書店(京都市内)
丸善、平安堂、文庫堂、大宮書房、キクオ書店、オデッサ書房、銀邦堂、駸々堂、ジュンク堂など



本野評論

新任教職員からの一言

人間どうしの対話を (人文学部教授 橋本初子)

文化財保護の仕事をして、文庫史料の調査・研究をしています。その現場では、沢山の伝統文化の技の道を歩まれる方々に出会い、ものを創るのも、ものを使うのも、また、も

「象牙の塔」の役割

(建築助教授 住野天平)

開かれた大学云々という安易な言動は慎みたい。社会を見るには結局象牙の塔にでも上らざるを得ない

クラブ紹介...吹奏楽部

吹奏楽部

八十九年四月、大学で吹奏楽をやろうと三人が集まりサークルをつくってから三年が経過しました。当時

は本当にゼロからの出発で、練習場所もなければ楽器もなく、部員もなかなか集らず、やはり無理かという声もありました。しかし、ポスター

を大学中に張り、楽器を借りる為に出身校へ頼みに行き、自治会や学生会の人の連の協力もあって部員も集り、少しずつではあるものの楽器も集り、教室も授業の邪魔にならないならば、ということで行われた洋上セミナーに参加し、初めて演奏を行いました。学内での自主演奏会は同じ年の秋、あはばりぶる実行委員の

ALUMNI MEETING

同窓会「木野会」

五周年の軌跡

一九八七年の暮れ、「精華より送られてきた『木野通信』第十一号」二通の手紙が同封された。一通は、創立二十周年に向けて卒業生名簿を作成しているの住所変更のさいはご一報を、と書かれていた。もう一通は、同窓会をつくりたいので協力してもらえませんかという連絡くださいとあり、返信用のハガキが添えられていた。

「木野通信」は毎年春に卒業生のもとに送られていた。見開きの新聞のような薄っぺらい印刷物だった。大学の変化、教職員の現況、そしてなによりも、ふつうの卒業生からのとりとめのない様子が「卒業生からの便り」として掲載されているのが楽しみだった。僅かながらも顔見知り人の近況が文章で紹介されているのを見るたびに、なつかしさをおぼえていた。

八三年を最後に、いわば大学と卒業生を結ぶ「木野通信」というかけ橋は途絶えていた。マスコミを通じて「精華」の話題や事件を目にするのがあっても、日常の複雑ななかで母校のことなど忘れていた。四年半の歳月を経て、新しく「木野通信」が二十六ページの小冊子として手元に届けられた。

満載された卒業生からの便りなど、盛り沢山の読み物に釘付けとなった。それらの片隅に英語英文科の第一回卒業生の集いが大学祭中に催されたという記事があった。

また翌一九八八年三月、その年度の英語英文科の卒業生が中心となり、宝ヶ池プリンスホテルにおいて「卒業生パーティー」が開かれたことを耳にした。過去の卒業生たちがその企画に協力し、その場では同窓会を設立したいという話が持ち上がったという。

た。大学側からは井上、呉、中平、梶川の四氏、卒業生側は約二十名が出席していた。ここでは具体的に大学祭である木野祭期間中に同窓会発足の式典を開くことが決定された。

六月に出席した四人の教職員の協力のもと、九月、十月と続けて会合がもたれた。回を追うごとに出席する卒業生が増え始めたが、発足にあつたことまざまざ意見が出され衝突することもあった。

十月下旬発行の「木野通信」第十二号には同窓会設立準備会の案内を掲載し来場を促した。発送のさいには、各学年専攻ごとに消息不明者名簿を同封し、卒業生名簿作成のため情報収集につとめた。

